

① 晨光会と新興大和絵会

大正期半ばの日本画科においては、帝室技芸員小堀鞆音、川合玉堂の大御所格教授は別格として、特に生徒の人気を呼んだのは結城素明と松岡映丘であった。両者は当時の文展、帝展の実力者であり、前者が自然観察に基づく清新な装飾画風を展開すれば、後者は大和絵の研究を土台とする新味ある作風を試みるという風に、作風こそ違え、ともに研究意欲盛んなところを示し、しかも教育にも情熱を注いだので、生徒も啓発され、おのずと素明派、映丘派に分かれて対抗意識を燃やしながら勉強に励むという形勢が生じた。

素明派の生徒は、卒業後大正七年に晨光会を結成した。結成の事情を同年十一月八日付『報知新聞』は次のように伝えている。なお、この記事によれば最初は会名を紅藍社と称したことがわかる。

青年畫家の紅藍社生る

美術學校の日本畫——卒業生二派に分る

從來美術學校日本畫卒業生間に組織せられたる行樹社が兎角不振を極め今年の如きは一回も展覽會を開かざるに反し同じく日本畫科出身の松岡映丘氏等の所謂複古土佐派は近來文展に於て優秀の地位を占め漸く地盤を築きつゝある現狀に促されて松岡氏一派の手法と容れざる篠田柏邦、矢澤弦月、小泉勝爾、太田義一、友田治夫、勝山恒躬、星川清雄の諸氏は這程一團體を組織して大に日本畫壇の革新を叫び主義として現生活を基礎としたる清新の藝術を宣傳せんとする由なるが彼等の團體組織は學校日本畫科出身生の二潮流を明らかに示すものにして其第一回展覽會を開くは來春

三月頃名稱も紅藍社と大に陣容を整へて青年畫家の氣焰を擧ぐる相である

晨光会第一回展は大正八年七月に高島屋呉服店楼上で開かれ、星川清雄、友田治夫、勝山恒躬、太田義一、矢澤弦月、小泉勝爾、篠田柏邦ら七名が、自然を題材とした写真味ある作品を発表し、各紙に「全部で二十枚ばかりであるが眞面目に努力したことが何より氣持ちがよい」「通觀して何等周圍の影響を受けず自然に對して理智的に而も實在性に富んだ寫意を努めてゐることが解る」「第一回としては可なりな成功である」などと、好評を以て迎えられた。また、第二回展以降、根上富治、畠山錦成、常岡文亀、日下八光らも加わつて大正十五年まで活動を続けた。

一方、映丘系の卒業生は大正十年に新興大和絵会を結成した。その第一回展については『東京美術學校校友會月報』第二十卷第二号に、

新興大和繪會第一回展覽會、松岡映丘、川路柳虹、兩氏を顧問とし、岩田〔正巳〕、狩野〔光雅〕、遠藤〔教三〕、穴山〔勝堂・義平、凶画師範科卒〕の四氏同人たる同會は第一回作品發表を〔大正十年〕五月八日より同十二日迄上野松坂屋に於て開催せり。

と記されている。のちに山口蓬春、高木保之助、長谷川路可も参加して活発な研究活動を続け、昭和六年二月に解散した(同誌第二十九卷第八号「芸苑彙報」欄参照)。会員のうち、山口蓬春、高木保之助、岩田正巳らが官展で名を馳せたのに対して遠藤教三、穴山勝堂、狩

野光雅らは専ら新興大和絵会のみならず作品を発表しながら研鑽を重ねた。なお、本書第二巻の校友会文学部、アブサント会、行樹社などの項に名前が頻繁に登場する川路柳虹は上記の月報記事にもあるとおり同会顧問であったが、彼は同会について次のように解説している。

新興大和繪會は松岡映丘のかつて示した大和繪の現代化の道を本道として進まんとする少壯畫家の一團で、一つの主義を捧持し、それを忠實に實現しようとする點に於ては、小團體中最も意義ある會である。これには顧問とし松岡映丘と共に、筆者自身も關與してゐるので批判の立場から見ても、或は誤解を受けやすい位置にゐるかも知れぬが、同好同趣といふでもなく、單なる門下生の畫塾的團體でもなく、それらとは別に獨立した主張あるといふことに於ては兎も角一つの特徴ある團體であることは斷言しうらと思ふ。會員は現在、岩田正己^(己)、遠藤教三、穴山義平、狩野政次郎、山口三郎、高木保之助の六人であるが、みな最近の東京美術學校の卒業である。これらの人々の制作は各自に一つの特徴はもつてゐるが、その出發の基調に於て日本畫の源流としての倭繪に根據をもち、その描法賦彩を今日の理智的觀察から新たに改變しようとすることに於て一致し、所謂漫然たる西洋畫法の採擇には立つてゐないものである。群綠本位の賦彩法や風景畫本位的になる傾向やが未だ多少單調な感じは與へてもこの點に確信をもつて出立してゐることに於て前途に充分望みを囑しうらと思ふ。〔下略〕

〔現代日本美術界〕大正十四年、中央美術社)

⑫ 日本画科生徒の帝展出品制限

大正十年六月、日本画科教官會議において同科生徒の帝展出品を制限するために次のような決定がなされた。

帝国美術院展覽會出品ニ関スル揭示案

帝展出品ニ関スル注意

當科生徒ニシテ右展覽會ニ出品スル者ハ卒業期、第四年級生徒ニ限り差許スコト

大正十年六月十四日 日本画科

理由

例年各学生ニ亘リ右出品製作ニ没頭スル者多ク為メニ九月始業後出席者少ク且又偶々右展覽會ニ入撰スル者アルモ為メニ慢心ヲ生ジ易ク其后ノ修業上甚面白カラザル結果ヲ生ズルコトアルガ為メニシテ嚮キニ教官會議ノ上決定ス

大正十年六月十五日 東京美術學校日本畫科

右取扱 山田 廉

これについて『書画骨董雜誌』第百五十九号(同年九月)は、同科主任教授川合玉堂の、一、二、三年生はまだ基礎教育期間であるから帝展出品は百害あつて一利なく、そのため出品を禁止したという談話を報じている。